

私の仕事 この九年

公共、学校、大学図書館の現場から

西川 奈緒

2014年3月に同志社大学を卒業し、図書館に勤めて9年が経ちました。この間、異動と転職により公共図書館、学校図書館、大学図書館に勤務いたしましたので、それぞれの現場で感じたことについて記させていただきます。こういうパターンの経歴もあるのかということで、ご参考になれば幸いです。

卒業後、山梨県庁の司書職で入職し、県立図書館に配属されました。山梨県立図書館は、オープンテラスにブドウ棚があったり、南側に面した窓から富士山が望めたりと、山梨らしさいっぱい図書館です。地域資料の網羅的収集、子どもの読書活動支援を始め、多様な図書館サービスを行っていますが、特に印象に残っているのは「やまなし読書活動促進事業」での書店、出版社との協働活動でした。

通称「やま読」と呼ばれるこの事業では、出版社、書店、図書館などがスクラムを組み、山梨の読書文化を盛り上げるためイベントを継続的に開催しています。イベントの内容は、作家を招いての講演会（そしてその夜には作家を囲んでワインを飲みながら語る会も）、県内書店と図書館を巡るスタンプラリー（2022年度は甲州印伝のしおりが景品だったとか！）など、山梨らしさをちりばめたものです。講演会では、図書館を会場としながら書店が搬入した本を販売していたのが印象的でした。また、イベント開催や懇親会を通して、書店、出版社の方とじっくり話す機会を得たことは大変貴重でした。出版不況、書店が相次いで閉店を余儀なくされる状況の中、本を作り・売り・貸す人たちが、山梨の読書文化を守るため真剣に深刻に向き合っており、公共図書館の役割も大きいものであると感じました。

県立図書館で4年間勤め、異動で県立高校図書室の勤務となりました。勤務校の図書室は、4階建て校舎の最上階の端っこ。生徒たちが足を運ぶひと手間がかかることは課題でしたが、大きな窓ガラス越しに美しい山々の眺望が楽しめる図書室でした。

学校司書が図書室業務を一人で行ういわゆる「ひとり図書館」で、約40人所帯であった県立図書館からの異動ということもあって、初めは心細く思いました。しかし、やがて慣れてくると高校図書室の仕事は自由度が高く、生徒たちの反応も直に感じられ、とても刺激的でした。興味深く思ったのは、図書館サービスの提供者と利用者のラインが曖昧であることです。「ひとり図書館」と前述したとおり司書は一人でしたが、先生たちは選書へのアドバイス、事務室職員は図書室の環境整備や資料購入、生徒たちは図書委員会などで、図書館の運営に携わっています。司書という実務者を軸に、みんなで図書館を作っていくのが学校図書館であると感じました。

この頃、家の事情により、県庁を退職し地元北海道に帰ることとなりました。これまでの経験を生かせればと図書館の求人を探したところ、北海道地区国立大学法人で図書系職員の募集があり、採用試験を受けることにしました。

現在勤務している北海道大学附属図書館は、札幌と函館に所在し、本館、北図書館及び16部局21図書（館）室から構成されています。入職から今まで本館にある雑誌部署に所属し、学術雑誌の発注・受入業務や電子ジャーナルの閲覧管理等を行ってきました。これまで勤務した図書館では学術雑誌を主として扱うことはありませんでしたが、学術雑誌は研究活動の根幹を支える資料であり、大学や研究全体に関わる課題を抱えています。こうして大学図書館員として初めに雑誌業務に携われたことは、貴重な機会だと考えています。

私はまだひとつの部署しか経験していませんが、北大図書館の note（文章や画像を投稿できるメディアプラットフォーム）では、様々な部署に所属する職員たちが日々の業務のこと、図書館員としてふと考えたことなどを文章で綴っています。コロナ禍という情勢により私自身も周りの職員との深い交流を持てずにいますが、こちらを通して他部署の仕事や考えを知ることができました。大学図書館への就職をお考えの方は、ぜひご覧になってみてください。

図書館サービスのコアは資料を収集・整理・保存・提供することだと思いますが、これまでの経験から、館種や規模によってサービスの幅は多様であり、それぞれに違ったやりがいと課題があることを知りました。図書館の強みは、図書館同士の連携力だと思います。今後は異なる館種の連携も含め、広い視野を持って図書館サービスに努めていきたいです。